

## 泣いた赤鬼と笑った青鬼

昔々、赤鬼と青鬼は鬼ヶ島で仲良く暮らしていました。鬼は、人間よりも体が大きくて力が強いことから、人間たちはいつか鬼が自分たちを襲撃してくるのではないかと考え恐れました。

そこで、人々は桃太郎とその家来たちに頼んで、鬼ヶ島へ攻撃をしかけて鬼を滅ぼしてしまおうと考えました。桃太郎と家来たちの奇襲攻撃は成功し、不意を突かれた鬼たちは次々に退治され、たくさんの犠牲者を出したのです。

鬼ヶ島は火の海となり、多くの鬼たちは住処を失いました。故郷を失った鬼たちの中には、鬼ヶ島を離れて人間の暮らす村へと逃れて来る者もいました。赤鬼と青鬼も、人が暮らす村の近くで生活することになりました。

優しい性格の赤鬼は、何とか人間社会に溶け込もうと考えました。そこで、赤鬼は自分の家でお菓子やお茶を振る舞って人間たちと仲良くしようと試みましたが、村人はなかなか赤鬼に近づこうとはしません。

村人に信用してもらえず、一人悲しみに暮れていた赤鬼の元へ青鬼がやってきました。赤鬼から事情を聞いた青鬼は、このように言いました。

「ぼくが人間の村へ出かけて大暴れをするから、そこへ君が現れて僕を思いきり懲らしめてくれ。そうすれば、人間たちは君が自分たちの味方で、優しい鬼だということがわかるだろう。」

でも、それでは青鬼ばかり悪者になって申し訳なく思う赤鬼でしたが、青鬼は半ば強引に赤鬼を連れて人間たちが住む村へと向かうのでした。そして作戦は決行され、青鬼は次々と村人たちを襲いました。そこへ、赤鬼が現れて青鬼から村人を守り、青鬼を懲らしめて村から追い払いました。

作戦は成功し、赤鬼は村人たちの信頼を得ることになったのです。赤鬼は人間と仲良くなり、やがて村人たちは赤鬼の家へも遊びに来るようになりました。

人間社会に溶け込むことができた赤鬼は、楽しい日々を過ごすようになりました。しかし、赤鬼は青鬼のことが気がかりでした。なぜならば、あれから青鬼の姿を一度も見えていなかったからです。

気になった赤鬼は、様子を見に青鬼の家へ行ってみることにしました。しかし、青鬼の家の戸は固く閉ざされており、人のいる気配がありません。そして、戸の脇に貼り紙が貼ってあり、次のように書いてありました。

「赤鬼くんへ

人間たちと仲良くして、楽しく暮らしてください。もし、ぼくが君と付き合っているところを見られたら、君も悪い鬼だと思われるかもしれません。だから、ぼくは旅に出ることにしました。でも、いつまでも君のことは忘れません。どうか体を大事にしてください。ぼくはいつまでも君の友達です、さようなら。」

それは、赤鬼へ宛てた青鬼からの置手紙でした。赤鬼は黙ってそれを二度も三度も読み上げては涙を流しました。

ここまでは、少々改編しましたが有名な児童文学『泣いた赤鬼』（浜田廣介作）とほぼ同じ内容ですが、実はこの話には続きがあったのです。ここからは青鬼の物語です。

赤鬼の前から姿を消した青鬼は、山奥へ身を潜めていました。実は、青鬼にはもう一つ別な目的があったのです。

赤鬼が欲しかったのは人間の友達でしたが、青鬼が欲しかったのは人間のお金と食料でした。青鬼は鬼ヶ島へ戻り、故郷を復興するためにはお金と食料が必要だと考えたのです。

そのためには、村で暴れ回って村人たちからお金と食料を奪う必要がありました。そこへ赤鬼が現れて青鬼を村から追い払い、赤鬼は村人たちの信頼を得て友達として受け入れられたのです。

赤鬼が村人たちと楽しく過ごしている間、青鬼は村人たちのお金と食料を持って山奥へ逃げ込んだのでした。何も知らない赤鬼は、青鬼が自分のために悪者になってくれたと感謝し涙を流しましたが、青鬼にとっては最初からすべて計画通りだったというわけです。しかし、赤鬼に対する友情に嘘はありませんでした。

青鬼は山奥に隠れ家を作り、そこに村人から奪ったお金と食料を隠しておくことにしました。そして、次の村を襲う準備に取りかかりました。青鬼は山を下りては村で大暴れを繰り返す、次々と村人たちを脅かしてはお金と食料を奪い取りました。鬼の形相で暴れ回る青鬼に、村人たちは恐れおののきました。

夜になるのを待って、青鬼はふたたび村へ下りてきました。青鬼が次に狙ったのは、村で一番大きな庄屋の屋敷でした。青鬼は表の門を叩き壊して屋敷の中へ押し入ろう

かと思いましたが、よく見ると裏口の戸が少し開いており、そのまま庭を通り抜けて台所へ通じているようです。青鬼は台所で食料を奪ってから、家の中にある金目の物を片っ端から持ち去ろうと考えました。

大きな体を折り曲げるようにして裏口の戸をくぐり抜け、庭を歩いて台所のある勝手口へ向かいました。勝手口の扉は意外に分厚く頑丈な作りになっていましたが、青鬼は気にせず扉の中へと入って行きました。

部屋の中は薄暗くて辺りがよく見えませんが、そのまま歩みを進めたときです。後ろの方でゴトっという音がしたと思うと、勝手口の扉は外から閉じられてしまいました。内側から押しても引いても扉はびくともしません。誰かが外からかんぬきを掛けて、扉を開かなくしたようでした。青鬼は力任せに扉へ体当たりしてみましたが、まるで歯が立ちません。やがて、遠くの方からろうそくの炎が近づいてくるのが見えました。

ろうそくの明かりで、ようやく辺りの様子が青鬼にも見る事ができました。そこは台所ではなく、分厚い木製の格子で仕切られた狭い牢屋の中でした。青鬼は牢屋に閉じ込められたのです。ろうそくを持って立っているのは、立派な身なりをした初老の男でした。どうやらこの家の主人のようです。

「青鬼さん、あんたは貧しい村人たちからお金や食料を奪った。また、村で暴れ回っては人々に怖い思いをさせてきたが、あんたはそんなことをして満足なのか？」  
庄屋の主人に尋ねられたが、青鬼は押し黙ったままでした。

「まあよい、今夜はそこで少し頭を冷やすといい。だが、腹も減っておるじゃろう。握り飯を作ったからそれを食べなさい。」  
そう言って、庄屋の主人は大きな握り飯を格子の間から青鬼へ差し出しました。

「毒は入っていないから安心しなさい。」  
庄屋の主人はそう言うと、廊下の奥の方へと去って行きました。青鬼は床に座り込むと、黙ったまま目を閉じました。

それから何時間かが経過し、青鬼が空腹と眠気を感じはじめた頃でした。外から何か焼く焦げるような臭いが漂ってきたのです。やがて、外が騒がしくなってきた人々の足音が聞こえてきました。どうやら外で何か事件が起きているようです。

ほどなく、廊下の奥の方からろうそくを持った庄屋の主人が、足早にこちらへ向かってくるのが見えました。主人は牢屋の前に立って言いました。

「大変だ、火事じゃ〜。もの凄い勢いで炎が燃え広がっており、もうじきこの屋敷に

も火が燃え移るだろう。このままでは焼け死んでしまう。今から扉を開けるから、あんたも今のうちに逃げなさい。」

そう言うと、すぐに主人は裏へ回ってかんぬきを外して扉を開いたのです。

「さあ、早く逃げなさい。ただ、これだけは約束してくれんか。もう村人に迷惑はかけないでくれ。今年は農作物が不作でただでさえ貧しい暮らしぶりなのに、この火事で多くの村人は生活に困るだろう。」

青鬼は主人に向かって深々と頭を下げると、足早にその場から立ち去りました。夜が明ける頃にはようやく火もおさまり、村人たちは広場へ集まりはじめました。すると、村人たちは何かに気が付きました。村の広場には沢山の食料とお金が山積みになっています。そして、近くに一通の手紙が添えられていました。

しばらくして、広場へやってきた庄屋の主人が手紙に目を通すと村人たちにそれを読み上げました。

「村の皆さん、ご迷惑をおかけしました。これまで悪さをして集めた食料とお金です。皆さんにお返しします。村の復興に役立ててください。本当に申し訳ありませんでした。青鬼」

山積みの食料とお金は、鬼ヶ島を復興するために集めたものでしたが、青鬼は全てを村へ返しました。これからは赤鬼同様、自分も人間たちと仲良く暮らそうと決心したのです。

村を後にした青鬼は、無一文になってしまいました。でも、身も心もすっかり軽くなった青鬼の表情は、いつもの鬼の形相ではなく晴れやかな笑顔でした。

おしまい